ICT 海外ボランティア会会報
No. 99

2021 年 8 月 1 日（日）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

急告：当会記事が JICA クロスロード 7 月号(下記 29 ページ)に掲載されました。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202107/pdf/crossroads_2021_07.pdf

目次

◆特別寄稿
オンラインコミュニケーションツールの可能性
一般財団法人　海外通信・放送ｺﾝｻﾙﾃｨﾝｸﾞ協力
専務理事
当会顧問　牛坂　正信

◆特別寄稿
岩槻日記(15)　当会特別顧問　石井　孝

◆国際交流基金の動き
日本語パートナーズ派遣事業の募集　事務局

◆海外グラフィティ
上海の芥川龍之介
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

◆海外便り
ハンガリー・オーストリア・ドイツ俳柳紀行(2)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之

◆第 9 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様　事務局

特別寄稿

オンラインコミュニケーションツールの可能性

当会顧問
一般財団法人　海外通信・放送
コンサルティング協力
専務理事　牛坂　正信

JTEC は、通信・放送を含めた ICT 分野の国際協力を実施している財団です。その協力の対象は、主に途上国を中心とした海外であるため、人の移動を止めざるを得ないコロナ禍の影響を直接受けることになりました。本稿では、1 年間 Web 会議ツールなどのオンラインコミュニケーションツール [1]（以下、オンラインツールと略す。）だけを使った業務実施状況について、個人的感想も含めお話ししたいと思います。

JTEC の活動は、途上国等へ渡航して直接面談しながら、調査を実施したり、案件形成のためのヒアリングを実施したり、或は現地で、又は本邦に招聘して集合形式での研修を実施するというスタイルです。渡航ができない、本邦に招聘できないという環境下で、試行錯誤が始まりました。

1. 在宅勤務が始まった

職員等のウイルス感染予防のため、オンラインツール利用による在宅勤務を 2020 年 3 月下旬から開始しました。JTEC では、2020 年のオリンピック・パラリンピック開催期間中の通勤混雑回避策として在宅勤務の実施を想定し、2019 年 10 月に 1～3 回程度在宅勤務を試行的に経験し、在宅勤務導入の課題把握、対策検討をしていました。今回はこれが役に立ちました。比較的スムーズに在宅で業務ができる環境が実現できました。しかし、問題はここからでした。

2. 不安はあるけどオンラインツールで頑張るしかない

緊急避難的に在宅勤務を始めましたが、在宅勤務中心で業務をどのように推進していけば良いのか職員一同しばし戸惑うことになってしまいました。4 月の時点でいつまでコロナ禍が続くのかさえ分からない中で、「渡航できるようになるまで待って何もしないでいると JTEC の存在意義が問われる」、「使えるオンラインツールを駆使して渡航できない前提でやれるところまで進めよう」、「オンラインツールを使いこなし新しい業務実施形態を作っていこう」等々、オンラインツールを使った業務運営を積極的にやっていこうと覚悟を決めて在宅での業務が始まりました。

最初に記載しましたように、調査業務や案件形成のための業務など、その殆どは現地

[1] オンラインコミュニケーションツール：ここでは、電話、メール、SNS、Web 会議、チャットなどに加え、オンラインストレージも含めて使用しています。

出張を核に活動するスタイルです。また、研修業務も日本に招聘したり、現地に出向いての対面形式で実施するものが主です。つまり JTEC 業務の殆どが、途上国の方々と対面で実施するスタイルです。そのような業務のやり方をオンラインツールだけでどこまでできるのか手探りでの模索が始まりました。

比較的順調に立ち上がったのは、前年度から継続している業務でした。決まった相手がいて比較的問題なくコンタクトも取ることができ、不慣れなオンラインでのコミュニケーションも次第に慣れ、業務を継続しそれなりの成果を出すことができました。勿論、全てが継続できたわけではなく、工事監理業務実施中のコンサル業務では、現地へ渡航ができず、現地でのコンサルができないため工事中断せざるを得ないケースも生じました。ただ、総じて言えば、コロナ禍以前から継続していた業務は相手側のコミットメントもあり、オンラインツール利用そのものの問題も少なく、従前のように業務を継続できるのだろうかという懸念は杞憂に終わりました。

JTEC 事務室内の手作り感染防止板

他方で、苦労したのが、新たに取り組もうとしている新規の調査・案件形成、研修活動などでした。ここでは例として、調査業務と研修業務について実施状況を記載します。

先ず、調査業務です。コロナ禍の状況では、現地に出張し面談を重ねることができないので、主に Web 会議ツールを利用して実施することになりましたが、コロナ禍の影響は日本だけではなく、途上国でも同様で、出勤しない・できないなどにより、相手国政府職員とのコンタクト、アポ取り等ができない、或はたらい回しにされたりとミーティング実現までに従来以上に時間がかかることもあれば、コンタクトすることすらできない状況も生じました。また、ミーティング時に依頼した情報の提供や回答も期限内に返送してもらえないため予定通りに業務が終わらない状況になり、調査対象や対象国を縮小せざるを得ない等々、業務が思うように進められないケースが多く生じました。総じて、進捗は遅れ気味、調査内容も制限されるものが多くなりました。

次に、研修業務です。JTEC での研修は、理解を深めるため、また、受け身にならないよう座学だけではなく、研修生同志によるグループディスカッションやワークショップの組み合わせ等を含めて実施するようにしています。このような研修をどうすればオンライン研修として効果的・効率的に実施できるのか、チャレンジが始まりました。商用 Webinar[2]ツール使用方法の習得を始め、研修方法や研修資料に多くの工夫が必要となり、担当者個人の能力だけでは限界もあり、職員同士の協力や外部支援の活用などにより、3 つの研修を実施することができました。参加国の地理的広がりのため、日本からの時差が大きすぎて、1 回の研修で終わることができず、2 回のグループに分けて実施するなど工夫も必要でした。オンライン研修に不慣れのため必ずしもすべてがスムーズに問題なく実施できたわけではありませんが、参加者からの評価はまずまず好意的な内容でした。オンラインでの運営が不慣れであることが大きいと感じていますが、ディスカッションが思うように進まないとか研修時間が制限されているため質疑応答の質が深まらないケースが生じるなど課題も見えてきました。また、一部の国では、ネットワーク状況が悪くなり、短期間ながら参加できなかった事例があったり、参加者側の回線状況や PC 能力

[2] Webinar：ウェブ（Web）とセミナー（Seminar）を組み合わせた造語、ウェブセミナーやオンラインセミナーともいう

などにより、PC がフリーズしてしまい講義全体に影響が出るようなケースもありましたが、総じて、オンラインツールによる研修は実用的でした。

JTEC オンライン研修の例

3. オンラインツールは業務運営に大きく貢献できる可能性が高い

この 1 年間、オンサイトでの途上国の方々との面談なしにオンラインツールだけで業務を実施してきました。ここでは、前述した調査業務と研修業務でのオンラインツールの可能性について、個人的に評価してみたいと思います。

まず、調査業務です。継続している業務においては、比較的早期に立ち上がり、それなりの成果を出しているものが多くあることから、有効なツールと言えるのではないでしょうか。他方、新規案件での調査業務は、「総じて進捗は遅れ気味、調査内容も制限されるものが多くなりました。」と記載しました。オンラインツールを使った業務形態の問題なのでしょうか？要因は何でしょうか？個人的には、その要因はオンラインツールを活用した業務のやり方の問題というよりは、コロナ禍の特異な環境下における途上国側の稼働問題や関心の有無に起因しているのではないかと推察しています。つまり、途上国側でもコロナ禍対策を手探りで実施している状況で、我々からのミーティング要請に応えられる余裕がない、遠隔コミュニケーション対応が遅れている、在宅勤務の導入で調整に時間が掛かかってしまう、或は、そのような状況下で自分たちのメリットの有無を考慮すると JTEC 対応の優先順位が低下したなど、新規ならではのハードルの高さ（相手国にとっては稼働工面や組織としての承認を得る必要がある等）がコロナ禍の影響でより顕著になったことが主要因ではないかと推察しています。途上国側のネットワークの制限で Web 会議ツールが十分な効果を発揮できないケースや、コンタクト先が限定されるなどの影響が出たケースもありましたが、業務推進への影響は限定的でした。コロナ禍が続いている中では、大きく状況が改善する可能性は少ないのですが、コロナ禍が収束すれば、新規案件でもそれなりに有効に使えるツールとなるのではないでしょうか。

次に、研修業務への適用についてです。講義形式の研修では、ある程度の質を維持しながら受講人数を増やすことができるため、受講希望者の研修機会を増加させるということで有効でした。また、講師を始めとした研修を提供する側の負担軽減にも貢献してくれるものとなりそうです。時差の問題を考慮する必要がありますが、時差がある範囲

内に収まるようにグルーピングするなど工夫することである程度解消できそうです。また、オンラインでの時間制限があるため、質疑応答の質維持のための時間確保やオンサイト研修では可能な休憩時間での講師と研修生の会話を通じた理解を深化させる機会が確保しにくいので、チャットを活用するなどその改善のための努力が継続して必要となるでしょう。他方で、ハンズオン研修のようなものにはまだハードルが高いと感じています。コロナ禍のような特殊な環境下でなければ、これらの研修は実際に集まってのオンサイト研修として実施するのが妥当のように感じました。また、受講者側での通信回線の容量不足や PC 能力の影響で、フリーズしてしまう事例も発生し、進行に影響を与えた事例も起きていましたが、この種の問題はいずれ解消されていくものと思われます。

4. 最後に

コロナ禍という特異な環境下、オンラインツールを活用してきて、一つ言えることは、「オンラインツールは JTEC の業務に十分使えそうだ」ということです。現状、人と人とのコミュニケーション全てをオンラインツールで代替できるという状況にはありませんが、ポストコロナ時には、コロナ禍における稼働の不自由さもなくなり、日常的にオンラインツールを使うことが一般的になることが期待されます。対面での交流はオンラインとは違った効果・メリットが期待できますので、オンラインツールの活用と実際の対面での交流を使い分けながら業務が進められるようになるのではないでしょうか。例えば、新規の調査業務などでは、その後の関係維持の取っ掛かりとしてとても重要な機会となりますので、オンサイトでの対面での面談を取り入れる一方、その後のフォローアップなどはオンラインツールで対応する、或は、誤解を避けなければならない重要な事柄を含んだ議論や相手の反応を見ながら交渉が必要なケースなどの場合はオンサイトでの面談形式で対応するというように、オンラインとオンサイトでの面談を効果的に組み合わせることで、コスト削減、時間短縮しつつ、業務の質を更に向上できるようになるのではないかと思っています。

研修への適用についても、例えば、１つの研修コースを、オンライン研修部分と本邦での集合研修と組み合わせることにより、全体のコスト削減、研修効果の向上などに貢献できるようになるではないでしょうか。

オンラインツールが補完的な役割から、オンサイトでの面談と同様な重要な役割を担うことが普通になる時代が、すぐそこまで来ているという事を実感した 1 年でした。

以上

特別寄稿

岩槻日記(15)

当会特別顧問　石井　孝

「現場巡視」

現役当時、暇さえあれば現場を見て歩いた。いちいち報告などを聴くよりは、自分の眼で現場を観たほうが手っ取り早い。

一足、現場に踏み込めば、うまくいっているか、何か問題が起きているか、その場の雰囲気ですぐに感じ取れる。

そこでチェックするかどうかはともかくとして、何かあった場合、迅速な手当が出来る。

現場は生き物であるから、親が子供を視るような所謂「手塩に掛ける」感覚が大事であると常々想って居た。

所で、昨今のリモートワークである。リモートワークに於ける「現場巡視」のコツとは、どんなものになるのであろうか。

「何時まで経っても、先生は先生」

今日、ウェッブ・ミーティングで、大先輩でもあり、私にとっては大切な恩師である方の、技術開発のあるべき姿についての講演をじっくりと聞かせて頂いた。

とうに 90 歳は越しておられるが、明晰な記憶力と明快且つ理論的な論旨には驚くばかりであった。

元々、跳びぬけて優れた頭脳と論理・経験に基づく勇敢な実行力には、追い付いて行くのが精一杯であったが、今日のお話を伺って、一向に先生との距離間隔は縮まって居ない事を痛感した。「何時まで経っても、先生は先生」なのである。残念ではあるが。

「何時まで経っても、先生は先生」（その 2）

恩師の講演を聴いて思い出した事がる。それは、我が恩師の更にその上の師が、コンピューター・システムについて語った言葉である。

「在来形交換機は一般の動物のようなもので、寒くなると体毛が生え、暑くなるとそれが抜け変るといった方式で環境の変化に対応する。

しかしこのような手段による適応には限度があり、外部条件が急激に、あるいは過度に変化すると死滅してしまう。

一方人間はこのような環境の変化に対して家を造り、着物を着、火をたくといった方法、つまり自分自身は変化せず頭脳の所産である道具を使いわけることによって対処する。

電子交換機の外部条件に対する適応のしかたは、ちょうどこの人間の適応のしかたと似ており、ハードウエアはそのままで、ソフトウエアの変更のみによって次々と新しいサービスを提供していくのである」

これは、電子交換機を例にした話であるが、コンピューター・システムの本質を突いた話である。

デジタル庁も結構であるが、コンピューター・システムの本質、その人間にそっくりな限りない成長性と、一方、育て方を間違えると、とんでもない事になってしまう特質

につて、世の指導者層に知らしめ、啓蒙する必要があるのではないか。

「何時まで経っても、先生は先生」（結び）

最も大事なわが師の技術開発（システム開発）に対する考え方を紹介して、本投稿の結びとする。以下は師の学位論文の序説からの引用である。

【エンジニアリングの目的は立派な商品やシステムに結実させることである。

システムは構成要素である部品、サブシステムが優れていることは望ましいことではあるが、それを積み上げて立派なシステムができるのではない。

システムの構築はピークの技術で決まるのではなく利用可能な技術を使って、外部条件のもとでサブシステムを選択し全体として調和のとれた構成が大切である。

以上はシステム開発の必要条件であっても十分条件ではない。

システムの詳細な点までを徹底した検討がなによりも大切である。

零戦の開発で堀越二郎氏は1gでも軽くするためドリルで穴をあけるまでしたといわれている。

全体の構想から詳細な点まできめ細かく徹底して検討するリーダーの指揮が大切である。

システムの構築はオーケストラの指揮に類似しているしているのではないかと思われる。楽器の良し悪し、独奏の評価は比較的易しいが、オーケストラの場合は、直接音を出さない指揮者によって決まり、その指揮者の考え方よって同じ曲を演奏しても異なって、評価が必ずしも同じとは言えないことが多い。】

「梅雨入り」

今年も、ここの所本格的な梅雨に入ったようである。コロナ禍で引きこもりに慣れてしまい、あまり外に出る事もないが、やはり鬱陶しい。

通勤・通学を行っていた頃は、本当に梅雨は嫌であった。私の住んでいる所は、かつては本格的な農村地帯であった。通学路は泥道で、雨が降ると、ぐちゃぐちゃになってしまい、そこで、下駄の鼻緒でも切れようものなら、足元は全て泥だらけになって、全く無残な状態になってしまう。

所で現在である、嘗ての泥道は全て舗装され、田んぼや畑は全て整地され、東京へ通勤するサラリーマンの戸建住宅が密集して、昔の面影はすっかり消え去ってしまった。

偶に、田舎暮らしをして居る友人を訪ねると、「早起きして、田んぼ道を散歩すると気分爽快だよ」などと言われると、ああー、昔は良かったなどと思ったりする。人間とは、まったく勝手なものだ。

「今夜の NHK」

夕方の七時のニュース前の番組紹介である。大きな声で怒鳴りまくっている。

民放のお笑い番組と張り合ってでも居る積りなろうか。

嘗ての NHK 放送は、如何にも上品で、民放とは違う、NHK らしさがあった。

NHK さんよ、東京オリンピックでの聖火リレー、最終ランナー実況中継、鈴木文弥アナの格調高い名放送を思い出して欲しい。

『－－－－－見えました。見えました。白い煙が、聖火が入ってまいりました。赤々と燃え上がるオレンジ色の炎、かすかに尾を引く白い煙。選ばれた最終ランナー坂井義則君が颯爽と入ってまいりました。

この一瞬をどんなに待ちわびたことでありましょう。－－－－－』

『右手に聖火を掲げ、流れるようなロングスライドで走る田岡正廣君。
　戦後の日本とともに育ち、戦後の日本とともに逞しく明るく成長してきた１９歳の田岡正廣君、その恵まれた体すらりと伸びた脚、広い肩幅、わずかに頬を紅に染め、感激に膨らむ胸を一杯に張って、美しいフォームで走るーーーーー』
　NHK 放送、何と素晴らしいではないか。

「東京オリンピック」

　色々と紆余曲折があったが、いよいよ「東京オリンピック」開催である。
　それにしても思い起こされるのは、前回の 1964 年「東京オリンピック」である。
　この時も、事前の世論調査では「オリンピックには大変な費用がかかるので、いろいろな点で国民に負担をかけ、犠牲を払わせている」とか「オリンピックに多くの費用をかけるぐらいなら、今の日本でしなければいけないことはたくさんあるはずだ」など、圧倒的な国民の支持に熱狂的に迎えられていた訳ではなかったようである。
　然しながら、東京オリンピック開催を契機に、競技施設や日本国内の交通網の整備に多額の建設投資がなされ、競技を見る旅行需要が喚起され、テレビ放送を見るための受像機購入の飛躍的増加などの消費も増えたため、日本経済に「オリンピック景気」といわれる好景気をもたらした。
　帝都高速度交通営団・東京モノレール羽田空港線・首都高速道路・ホテルなど、様々なインフラストラクチャーの整備が行われ、都市間交通機関の中核として東京（首都圏）から名古屋（中京圏）を経由して、大阪（京阪神）に至る三大都市圏を結ぶ東海道新幹線も開会式 9 日前の 10 月 1 日に開業した。
　開会式が行われた 10 月 10 日は、1966 年（昭和 41 年）国民の祝日に制定され、以降「体育の日」として広く親しまれるようになった（2000 年（平成 12 年）より 10 月の第 2 月曜日、2020 年（令和 2 年）より「スポーツの日」となった）。
　些か長時間に亘るが、1964 年「東京オリンピック」開会式の実況中継、鈴木文弥アナの名調子を、お時間があったらお聞きいただき、当時を振り返って頂きたい。

「苦労知らずか」

　賛否色々とある中で、東京オリンピック開催にこぎ着けた。さてその開会式である。
　著名人と言われる方々の出欠席の話である。かなりの方々が、世論を意識してか如何かは知らないが、欠席を表明して居るような感じがする。
　これだけの大きな大会を、しかも、コロナ禍の中で此処まで、与えられた仕事として持って来た方々のご苦労を想うと、何はともあれご苦労様でしたと言って、せめて出席ぐらいするのが人情というモノでは無いのだろうか。

＜事務局注＞　岩槻日記のホームページが下記に変更されました。
　https://www.facebook.com/koh.ishii.3

国際交流基金の動き

日本語パートナーズ派遣事業の募集

事務局

国際交流基金(JF)は日本語パートナーズ派遣事業について 9 月 15 日(水)まで募集しています。海外と日本の架け橋になりたい方、海外で日常生活・協力活動してみたい方(旅行・出張ではなく)など、奮ってご応募いただければ幸いです。
https://jfac.jp/partners/apply/　https://jfac.jp/partners/event/

インドネシア	募集人数：50 名	派遣期間：2022 年 8 月～2023 年 3 月
タイ	募集人数：70 名	派遣期間：2022 年 5 月～2023 年 2 月
ラオス	募集人数： 4 名	派遣期間：2022 年 8 月～2023 年 5 月

1. 趣旨

幅広い世代の人材をアジアの中等教育機関へ派遣し、現地の日本語教師と日本語学習者のパートナーとして、授業のアシスタントや会話の相手役といった活動をするとともに、教室内外での日本語・日本文化紹介活動等を行い、アジアの日本語教育を支援する。同時に、日本語パートナーズ自身も現地の言語や文化についての学びを深め、アジアと日本の架け橋となることを目的とする。

2. 活動内容

(1) 現地の日本語教師が行う授業への協力
(2) 授業の教材作成等への協力
(3) 授業や課外活動における生徒との交流(日本語での会話、文化活動への協力等)
(4) 派遣先の JF 海外拠点等が実施する日本語教育事業への協力
(5) その他、現地の要望に応じて、地域における日本語学習支援、日本文化紹介を通じた交流活動等

3. 待遇

滞在費(月額 10 万円～14 万円程度)、往復航空券(ディスカウントエコノミー)、旅費等の支給と住居が提供される。

4. 応募要件

(1)満 20 歳から満 69 歳で日本国籍を有する日本語母語話者の方
(2)日常英会話ができる方(英語で最低限の意思疎通が図れる程度)
(3)派遣前研修(約 1 か月間)に全日程参加できる方、等
(注)日本語を教えた経験がなくても良い。特技のある方、人生のキャリアを積んだ方、アジアとの交流に熱意を持った方の応募が期待されている。

海外グラフィティ

上海の芥川龍之介

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

およそＮＨＫらしからぬドラマが放映され、再放送も深夜だが、食い入るように見てしまった。“魔都”上海を舞台に、ベースは“芥川龍之介”の「上海游記」であるが、「渡辺あや」が相当現代風にアレンジしている。芥川は、大阪毎日新聞の特派員として短期間、上海に滞在、艶めかしい部分を相当誇張して描いている。時は大正１０年中華民国建国１０年。清朝の残照も残る、国際都市の上海を余すところなく映し出している。

游記とはなっていても、旧所名跡は全く出てこない。人間の方が面白いと主人公に言わしめて、そこにうごめく男と女、混乱している中国の政治家、思想家、芸妓をかなりストレートに描写している。孫文の創設した中華民国だが、底流に毛沢東の共産主義の胎動も見られる。そこは、中国であって、様々な民族が欲望の赴くまま生きている。「まじめなのは満州へ、少し柔らかい日本人は上海に流れたものだ」と職場の大先輩に聞かされたものだ。以前、「上海バンスキング」という二度にわたって映画化された舞台を、昔、興味を以てみたものだ。そのキャッチフレーズが「生バンドでつづる、黎明期のジャズマン達の恋と夢、あの街には、人を不幸にする夢が多すぎた」。町がいかがわしいが魅力を持っていた、まさに魔都なのだ。バンスとは前借りのことで、在るジャズマンがクラブのオーナーからいつも前借をするものだからバンスキングと綽名されていたためにこの不思議なタイトルになったようだ。

芥川が表現したいくつかの文章は実に印象深い。「舞踏場はかなり広い。が、管弦楽の音と一緒に、電燈の光が青くなったり赤くなったりする具合はいかにも浅草によく似ている。唯、その管弦楽の巧拙になると、到底浅草は問題にならない。其処だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞踏場である」。京劇も見る。女形の緑牡丹に興味を持つ。自分も京劇を何度も日本で見たが、あの胡弓、月琴、銅鑼は騒々しいが懐かしい。特に武劇は鳴り物の騒がしさはすさまじい。

最も紙面を割いているのが、美女のことである。南国の美人（上）（中）（下）と具体的に中国人美女をほめたたえている。「・・・志那の女は、・・・耳が美しい・・」。政治については、ある中国人にこう語らせている。「・・志那の国民は、元来極端に走る事をしない。この特性が存する限り，志那の赤化は不可能である。・・・中庸を愛する国民性は、一時の感激よりも強いからである」。ところが、どうであろうか、国民党との内戦を経て、共産主義国に今はなっている。このころ、小規模ではあるが、既に共産主義者の全国集会が開催されている。中華料理も褒めている。「その代わり、料理は日本よりも旨い。聊か通らしい顔をすれば、北京よりは劣るが東京の志那料理に比べれば、・・・旨い。しかも値段の安いことは、ざっと日本の五分の一である」。原案の芥川の著作に無い美女「玉蘭」も登場させている。それを演じた女優の「胡子攻」は確かにおそろしいほどの美女だ。

結局、低評価の部分もあるが全体のトーンは上海賛歌となっている。（2020.11.23 完）

海外便り

ハンガリー・オーストリア・ドイツ俳柳紀行(2)

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

世(よ) 変わるも花持ち集う終戦日

5 月 9 日はオーストリアの終戦記念日だという(The end of war against Soviet)。オーストリアの歴史は神聖ローマ帝国、ハプスブルグ家(王朝)の時代を経てプロイセン、ロシアとの関係に揺れる。普・露・墺の三帝同盟(League of the Three Emperors:1873 年締結)後、仏の台頭もあり普・伊・墺三国同盟(Triple Alliance:1882～1915)に動くも、欧州の連合関係は複雑な展開を見る。これはパン・スラヴ主義とパン・ゲルマン主義の対立が根底にあり、オーストリアは 1938 年以来ドイツに吸収され、枢軸国形成に加わり第二次世界大戦へと突き進む。戦後は英・米・仏・ソ 4 連合国の管理下に置かれるも、戦前からの対立国ソ連から執拗に狙われる。それでも 1955 年 5 月国家条約で独立を回復、同年 10 月永世中立国となってソ連の容喙をも完全に遮断する。

このような背景があっての終戦記念日かと改めて思い知る。ベルヴェデーレ宮殿の下宮を抜けて楽友協会方面に歩を進めて行くと、中央に噴水を構えた大きな広場がある。軍服や民族衣装を着た大勢の人々が手に手に花束を持って集まって来る。傍にいた若い二人連れに声を掛ける。二人のたどたどしい英語を繋いでみると、70 年前の対ソ連防衛戦の終焉を記念して祝う集いだということが分かった。彼等の祖父や祖母たちの団結と犠牲によってもたらされた勝利だと強調する。世代を跨ぐ老若男女に暗い影はない。祭壇に持参の花束を添え、みな和気藹々談笑、今日の平和を享受する。ついでに街頭デモ行進を行い解散する。

セレブるや 一重(ひとえ) 二重(ふたえ) に見栄を張り

カルチャーぶる 鴨(かも) 葱(ねぎ) 背負う観光客

感激で眠気もとれる歌劇場

ウィーンのリング内の繁華街には多種多様な人間が蠢く。一般に派手で賑やかなムードが漂う。ホコ天(歩行者天国)を特異なコスチュームで練り歩く者や、街頭パフォーマンスで大衆を惹き付ける者、また大きなブランド名の買物袋をぶら下げた女性や、パリッと身形を決めた紳士も見かける。金持ちもいれば乞食もいる筈だ。彼等の国籍もまちまちであろう。特に国立オペラ座界隈では名だたるホテルやブランド店、レストランが品格を競い合い、集まる人間どもも上品ぶる輩が多いように見受ける。そんな観光客をカモろうと古式衣装を着用して道行く人に「今宵のオペラ観劇はいかがですか」と客引きする。己は文化人だと、のぼせ上がった連中が誘いに乗る。ウィーンはやっぱり見栄っぱりが跋扈する街のようである。でも実際にオペラ観賞の御仁は皆没我の境地に陥る由。第 3 句、感激は観劇に通ず。

ガフェするやお菓子の 梯子(はしご) ウィーン市街

街楽しトラム地下鉄乗り継ぎて

シェーンブルン宮殿やウィーン西駅周辺は探査済み、今回はリングという環状線内側の見残し所に絞って踏査しよう。二度目のウィーンともなれば各種乗り物を熟(ｺﾅ)して行きつ戻りつ気ままに巡る。ウィーンは昔からお菓子の街、王家へ献上の銘菓がいくつもある。名門ホテルが兼営するカフェ・ザッハー、一度は体験しようと企んでいた場所、お上りさん気分で立寄る。店内には気取ったお歴々がケーキや食事に至福の時を過ごす。勿論、同類の日本人もちらほら、お行儀よくザッハートルテを賞味する。チップもたんまり置いて自己満足する。その日の午後、場所を変えて 1788 年創業の皇室ご用達のケーキ店デーメルを訪れる。午餐に近い時間帯とあってか店内は満席、立ちん坊の席待ち客で大混雑、とても待ちきれない。店のショーケースに並ぶケーキを買ってテイクアウト、立派な紙袋に入れて貰い、そおっとホテルに持ち帰る。大抵のホテルには湯沸かしポットとティーバッグが置いてある。ゆったりと二人だけの午餐を楽しむ。これが一番の正解である。

これでもか 奢侈(しゃし) を誇示する王宮展示

絢爛の一品ごとに職人技

栄耀栄華を極めたハプスブルク家の本丸ともいうべき王宮に踏み込む。ハプスブルク家の覇権は、1278 年に同家の神聖ローマ皇帝ルドルフ 1 世がオーストリア公に就いた時から始まり、オーストリア・ハンガリー二重帝国時代などを経て第一次世界大戦でオーストリアが降伏、革命で共和制に移行した 1918 年を以って同家による支配は終わる。この 640 年間、ハプスブルク家のオーストリアはヨーロッパの波乱に富む歴史の中で版図を維持してきた。ある時はオスマントルコの脅威、また三十年戦争とウェストファーレン条約、ナポレオン・フランスとの妥協、プロイセンの台頭と普墺戦争など多くの試練に耐えた。それができたのは何故か？領邦・列強との融和(e.g.血縁関係)、莫大な富の集積(e.g.塩・工芸)、宗教改革の影響(e.g.カソリックに専信)、地政学的条件(e.g.要塞堅固)等々。けだし内政では人民保護、外交では絶対主義に距離を置く等、合従連衡と余計な戦争はしないという専守防衛に徹したからではなかろうか。

したたかなハプスブルク家の煌びやかな形見の品々を広大な王宮とシシイ博物館に見ることができる。フランツ・ヨーゼフ 1 世の妃エリザベート(シシイ)との出会いも歴史の偶然として興味をそそられる。銀器博物館では宮廷の生活調度品が多々展示され、ザクセン経由で収集した見事な伊万里焼や、タオルの品質向上と芸術的収納法の経緯展示も面白い。とにかく豪奢な逸品ばかりで目がくらむ。その一つ一つに当時の職人たちの魂が込められ、洗練された技量の質の高さが伝わってくる。

外見より中身が凄い王宮かな　　ケーキはケーキ名前を食べるザッハトルテ

息詰まるハプスブルクの贅尽くし　　いざ行かんザルツブルグへ 2 等列車で

中世の城塞堅固サバイバル

ザルツブルグに着いたのは午後 2 時ごろ、天気は好し。これなら傘もいるまいと軽装

で街歩きに出掛ける。そして最後はホーエンザルツブルグ城塞に上り、絶景ポイントから街全域を眺めて一日の締め括りにしようと目論む。ミラベル公園は土曜日とあって観光客でいっぱいだ。パンジーやチューリップが彩る美しい花壇、庭園の所々にユーモラスな彫刻、人々は午後のひと時を思い思いに憩う。ミラベル宮殿で結婚式を終えた花婿花嫁が仲間と写真に納まる。その頃、ポツリと水滴が顔に当たる。周囲の空を見上げると一部に黒雲が見える。でも我々の方角には動いていない。ザルツブルグはモーツアルト生誕の地、彼にまつわる見所も多い。それらを尋ねるべく歩き出すと雨脚が早くなってきた。それなら観光ポイントを外から眺めるだけで足早に通り過ぎて行く。旧市街の中心レジデンツに来ると本降り、最早街歩きは無理と判断しケーブルカーで城塞へ一気に上ることにした。

煙雨の中、城塞テラスから一応絶景を確認、後は城塞内の展示へ移る。雨を気にせず当地・当城の曰くに耳傾ける。これが結構面白い。ザルツブルグ城は 1077 年大司教ゲープハルトによって着工される。当時はローマ教皇派の司教が善政を敷いて統治していた。でも完成は 17C、城内には各種武具の展示や拷問部屋もあって戦乱の中世を生きてきた証を留める。実に堅牢堅固な山城である。中世は火薬以前、石球弾を撃ち込んで攻めるしかなかったのだ。下山する頃になっても雨脚は衰えない。ずぶ濡れになってホテルに戻る。

庭園や何処も花に迎えられ(ザルツブルグ)　　貴賤無く死して人皆ドクロなり

名も知れぬユーモア像に和むかな　　ハルシュタット観光客がぞろぞろと

塩の道残雪煙る雨の中
テーマパークや岩塩坑道ハルシュタット

翌日は足を延ばしてザルツカンマーグートへ、本来なら残雪の山々に囲まれた湖沼地帯、緑深き自然の中にカラフルな集落が佇む景勝地である。雨の中、今旅行最大の目的地であるハルシュタットを目指す。行きは列車を乗り継ぎ、帰りはバスでサウンド・オブ・ミュージックの舞台となった辺りを巡りザルツブルグに戻る。

ハルシュタットは古くから岩塩鉱で栄えた町、先史時代の人類にとって塩は貴重な存在、その命の源を探る。ケーブルカーで上り数百メートル山道を歩いて坑道入口に、すでに大勢の見学者が待っている。皆汚れてもいいように指定の専用服をまといグループで行動する。その仲間に加わり狭い坑道を歩き、木製のスロープを滑り下り、トロッコにまたがって移動するなど、スリリングな見学コースである。坑内の所々で映像やサウンドによるインストラクターの説明がある。総じて 1 時間半、びっしりと学び・遊び・楽しむ仕掛けである。

そもそもハルシュタットを選択したのは、古代から中欧に人が住み、往来した「塩の道」の素因を探りたかったからである。前川君と麻衣さんのコンビが繰り広げる TV「ドイツ語講座」を観て決めた。快晴の自然景観は彼等と共有できなかったが、雨中のしっとりとした湖畔の街を堪能した。そして何よりも電気もない山中から岩塩精製方法の術を知り得たことは大きい。地底で掘削した岩塩を水に溶かし地上に送る。それを再び固形化ないし粉末化して利用する。電気もない時代から続く製法は、まさに人類の知恵である。

身構えて岩塩掘りに入坑せむ(ハルシュタット)　　モノレールで出口へ、あゝ面白かった！(赤：爺)

延々と狭き坑道突き進む　　*誇らしげ年季の聖堂ステンドグラス*

観光地いずこもチャイナ占領地
世は狭しチャイナ問題よぎるかな

ハンガリーにしても、オーストリアにしても、はたまたドイツにしても、今や世界中の観光地は中国人に占領されている。レッドチャイナだけでも世界人口の 20%を占めるご時世である。それに華僑や台湾人も彼等と同国人に見做され、さらに日本人、モンゴルやアジア系諸国人も黄色人種として同一視されかねない。その中で中国本土からくるツアー客は圧倒的に多く、はた迷惑を顧みない横柄な振る舞い、大喚声、超派手な服装など、傍若無人な集団行動に皆々眉を顰める。それでも面従腹背、彼等が大歓迎されるのはカネを落としていくからである。

中国共産党政権に抗するウィグルやチベット、香港や台湾など、中国国内問題の余波をザルツブルグやレーゲンスブルグに見る。ハルシュタットに行く途中、自然に溶け込む瀟洒な人家の庭先に「西蔵独立」の看板が建つ。チベットから遠く離れた地、世界遺産の中に政治問題の歪みを見る思いである。またドナウ川岸のレーゲンスブルグ、街中で信号待ちしていたら自転車に乗った若い女性から声を掛けられた。チベットからやって来た大学 1 年の留学生、よほどホームシックに掛かっていたのか日本語と中国語でしばし立ち話。祖国の未来に対してどう思うか時間が無くて結論まで至らなかったが、彼女にとっては大きな問題である。

大帝の名前と共に街栄え

大聖堂 桐(きり) 花(はな) 添えて荘厳なり

中世ヨーロッパは、キリスト教徒の聖地巡礼や十字軍の遠征などを通じて交通網の発達と交易が盛んになる。各地に帝国自由都市が生じ、地中海地域と北海・バルト海地域を結ぶドナウ川周辺も繁栄する。その一つアウグスブルグを訪れる。ここはローマ帝国創始者アウグストゥス(尊厳者の称号)の偉大な名を冠した都市で、年季の入った大聖堂(904 年着工)がある。ステンドグラス(11C 後半の作、世界最古)など内部は荘厳にして高貴な雰囲気が漂う。折しも満開の桐の薄紫花が辺りに香気を振り撒く。大聖堂から南に 700m ほど下ると、17C 前半に造られた市庁舎が風格のある姿を現わす。正面には市の紋章の松ぼっくりと趣あるファサード、館内には当時の権勢を示す黄金のホールがある。この他にもドイツ・ルネッサンス様式の建物はたくさん残っている。これらは中世に財を成したフッガー家のもとに築かれた遺産であるが、当時、貧しきキリスト教徒のための福祉施設を創設したマクシミリアン大帝等の善政も忘れてはなるまい。それが街の発展を促したのである。現在、ロマンチック街道の一都市としてドイツ観光に寄与しているようだが、これからの将来像はいかに？

ウェブサロンの話、あれこれ

第 9 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

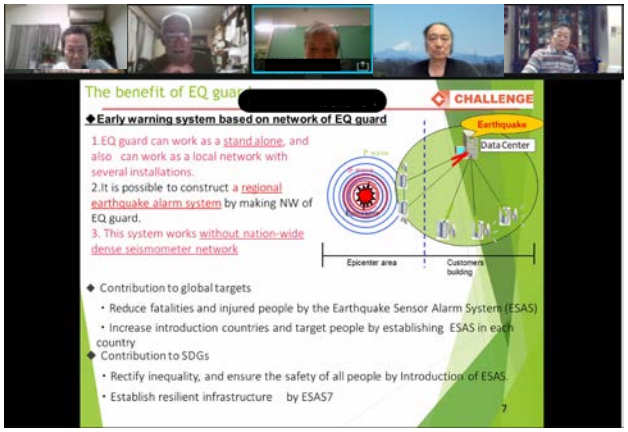
第 9 回 ICT 海外情報ウェブサロンが 2021 年 7 月 17 日(土)19 時 30 分～21 時 30 分、ウェブ会議室において開催された。JICA クロスロード 7 月号(29 ページ)に掲載された当会記事を見て初参加された方(女性)もあり、また 8 月上旬にガーナへ出張する佐々木様による飛び入りの話題提供や当会の倉島幹事から「パキスタン辺境地の話をしてみたら」のプレゼンがあり、盛りだくさんで時間が過ぎるのを忘れるくらいであった。主な話題を以下に示す。

＜佐々木様＞

・直下型地震に対応するセンサー内蔵地震速報装置(10 カ国語対応)を世界に向けて販売している。

・地震発生時は身の安全を確保することが大切であり、避難訓練などに力を入れている。ルーマニア、ガーナ、パプアニューギニアなどでの避難訓練は大変好評だった。

・コロナ禍ではあるが、8 月上旬に再度、ガーナに出張するほか、9 月と 10 月にも海外出張を予定している。



＜倉島幹事＞

・かなり古い話であるが、JICA 専門家としてパキスタンに派遣され、中央電気通信研究所に勤務したので、当時の写真を探し出してきた。⇒風光明媚で、ホッとする風景の連続に非常に感動した。

・研究所の給水栓の不始末で床が濡れて通信装置が危険な状態になった時、JICA 専門家は急いでモップで拭いていたが、現地技術者はカースト制のため、掃除係が来るのを待つだけだった。

・技術協力は、あまりうまく進捗できなかった。

・住居は 300 坪、床はすべて大理石、6 畳ほどのバス・トイレが各部屋にあった。

・第 2 次世界大戦中、命がけで日本側を支援したブルハヌ・ウッディンというパキスタンのチトラル王族と知り合った。戦後も、カラコルム山脈での日本人遭難の際に、捜索活動を強力に支援した。

・イスラマバードで借りた住居は彼の親戚が建てたことが後でわかったが、縁を感じるものだった。

・彼との縁で、パキスタン辺境地のチトラルの城で食事をしたり、おとぎの国のカラーシャ族(死者をお祭りで送る、帽子に海で取れる貝飾りの不思議)に合うことができた。その他、仏像発祥地のガンダーラ、インダス文明発祥地のモヘンジョダロ、アレキサンダー大王が行軍したカイバル峠など、今は旅行できない辺境地を訪問することができた。
・アフガニスタン難民キャンプのテント群もあった。
・イスラム教は、信仰告白(シャハーダ)、礼拝(サラー)、喜捨(ザカート)、断食(サウム)、巡礼(ハッジ)が基本である。
・ジハード(聖戦)の背景、ハラムと豚肉、女性の待遇(物・財産、教育、重刑等)、ムトア婚(偽装売春婚)なども知ることができた。
・日本人としては、①イスラム教を冒涜しない(コーランを粗末にしない)、②ハラムがあることを理解する、③女性の待遇が異なる(ミニスカート禁止等)、④一日 5 回の礼拝を邪魔しない、などに気を付けることが必要だ。
・上記以外にも、一般に話せないことがいろいろとある。

チトラル城をチトラル川から

カイバル峠から国境を臨む

質疑応答は多くの参加者から多数あり、真に(ウェブ)サロンの雰囲気であった。以下は一部の回答例である。
・今回の話をウィキペディアに掲載しては、という提案は、一般の社会からみて不適切と思われるかもしれない部分があるので難しい。
・海外研修生の校長先生をしていた時に、イスラム教徒の研修生が本国には一人の奥さんがいるにも関わらず、日本人コーディネーターを好きになってしまい、妻にしたいとのことで、苦労したことがある。
・メッカから遠くなるほど、イスラム教の厳格さが緩くなる感じがする。
・イスラム教では、何かを贈った時、持てる者から受け取るのは当然と思われることがある(喜捨ということ)。

上記以外にも、参加者のご経験談として、イスラム教は人による戒律だ、イスラム教は強者が弱者を助けるしきたりがある一方、仏教徒は奉仕活動が少ないのではないか、メディアは事実の 80～90%は言えないので報道されていることが全てであるとは思わないように、などのご意見もあった。

また、今回初参加された方は JICA 青年海外協力隊に応募したとのことであり、語学力を心配していることに対して、JICA で語学トレーニングがあり、また語学力よりも現地で明るく楽しく活動することが大切、との経験者によるエールがあった。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 99 号を発行することができました。今回は当会の牛坂顧問(一般財団法人　海外通信・放送コンサルティング協力　専務理事)から「オンラインコミュニケーションツールの可能性」のご寄稿をいただくとともに、岩槻日記、海外グラフィティ、ハンガリー・オーストリア・ドイツ俳柳紀行のご寄稿も継続していただき、誠にありがとうございます。

当会記事が JICA クロスロード 7 月号(下記サイトの 29 ページ)に掲載されました。ご笑覧いただければ幸いです。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202107/pdf/crossroads_2021_07.pdf

国際交流基金日本語パートナーズ派遣事業募集についても掲載しました。奮ってチャレンジしていただければ幸いです。

当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。
https://ictov.jimdo.com/コメント/

ICT
海外ボランティア会

会の目的

■会員相互の交流を促進する
■国内外の企業などと交流し、その支援を行う

2021年2月に開催したサロンの様子

JICA海外協力隊経験者を中心に、ICT（情報通信技術）分野の国際協力や国際ビジネスに携わったことがある人、あるいは現在携わっている人などで構成される当会が設立されたのは2008年。活動の中心は、ICT分野の国際協力や国際ビジネスに携わる人や企業を支援するため、海外のICT事情などに関する情報を発信することである。

発信方法の1つは、ウェブサイトで公開している会報。年に6回発行している。もう1つは、当会会員や外部の専門家が講師となるサロンである。コロナ禍に入ってからはWeb会議のみで行っているが、以前はWeb会議とリアル会議のハイブリッドで行っていた。頻度は2カ月に1回程度で、会員以外の参加も受け入れている。「タイの通信会社」「世界におけるサイバー攻撃の動向」「工学系高度人材育成の動向と海外との比較」「ヘルスケアICTサービスの基礎と新興国市場への展開」など、扱うテーマは多岐にわたっている。現在は、サロンの参加者が1対1で交流を図ることができるよう、終了後に「個室」も設けている。

「当会には豊かな経験を持つ80代の会員も多数おり、サロンは気楽な雰囲気でありながら、知的な刺激を受けることができるものになっていると思います。サロンの予定は当会のウェブサイトに毎回案内を出していますので、海外のICT事情に興味がある協力隊員の方々にはぜひ、気軽に参加していただきたいと思います」（山川博久事務局長）

Outline

正式名称	ICT海外ボランティア会
設立時期	2008年
法人格	任意団体

Organization

代表者	石井孝(シニア海外ボランティア／タイ・電気通信・1999年度派遣)
会員数	約500人
入会資格	■正会員：ICT(情報通信技術)分野の国際協力・国際ビジネスに携わったことがある／携わっている法人、団体、個人 ■賛助会員：会の趣旨に賛同する人
会費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会(名称は「年度末運営会議」)
会員総会の頻度	毎年2月に開催
役員会の頻度	毎月1回開催
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト・Web会議

Contact

問い合わせ窓口	■nfo.ictov@network.email.ne.jp ■https://ictov.jimdo.com
情報発信の手段	■https://ictov.jimdo.com

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)